

# 松帆浦物語

遠からぬ世の事にや侍りけむ、四條わたりに、中納言にて右衛門のかみかけたる人なむおはしましける。中將殿とて御子ひとりありて、さうさうしくおぼしけるに、ありありてちぞ出でし給ひにける。おひさき見えてかたचितうつくしく物し給ひければ、かぎりなくかしづき給ふほどに、父の卿ははかなくなり給ひぬ。たづなきやうにておはしましけるに、中將の君らうたき物にして、十ばかりまでぞ有りける。そのうち横河に禪師の房とて、此のをぢになむおはしける。中將に申し給ふ、「このわか君、いたづらにおひ出で給はむよりは山にのぼせて物ならはし給へかし」などよりよりす、め申されしかば、横川へぞのぼせられける。大かたの學文にも和歌の道にも心をいれて、筆とる事もたどしからず、はかなきささみごともつぎつぎしく、心さま人にすぐれたりしかば、一山のもてあそび、ちご童子もむつまじきことにおもひしほどに、三年ばかり此の山に送りけるになむ。かゝれば此の母君久しくみぬはかなしとて、折々里へよばせけるに、あるとき禪師申されけるは、「がくもんのかたもさどくかしてき人なり。法師になして父の御跡をもとはせ給へかし」などねんごろにかたらひ申し給へば、「あたらかたちを墨の袖にやつさむも情なく、八重たつ雲にまじりなむも心くるし」などのたまひて、うちとけたる答も去給はねばちからなし。かくて後はあやふくや

思はれけむ、京にすませむとを中將にも申し給ふに、つれづれのなぐさめにもとを思はれけむ。おなじ心にのたまへば、禪師もいかりせむとて、なくなく京へぞおくりける。此のちごもよ河にすみつき給ひければ、さびしかりし山水にも名残多く、あそび伴ひしちごわらばにもはなる、ことなむかなしかりける。みな京ちかきおたりまで送りきてぞなごりをしみける。さて禪師立ち歸りて、とし月手習などしてすみ給ひし所を引きあけて見給へば、いとうつくしき手して障子に書き付けらる、

「このへにたち歸るとも年をへてなれし深山の月は忘れじ。これを見て禪師の君よか  
はじめて、みななきにけり。かくて後は元服して藤侍とぞ申しける。あげおとりもせず、い  
よいよ目おどろくばかりのかたちにて物し給ひける。十四になり給ひし春の頃かとも、もと  
立ちなれし横川の法師、又京にも優なるをのこあまた來あひて、「北山のさくらいまなむさ  
かりなるよし人申すなり。侍従のきみ見給へかし。伴ひ奉らむ」とくちもちいへば、深山がく  
れの色香もことにゆかしき心ちして、俄に思ひたちぬ。道のはども人めつゝ、ましければ、わ  
ざとやつしてぞおはしける。わかきとち駒なめてみちすがらながめわたせば、遠き山のはそ  
こはかとなき霞みつゝ、野邊のけしき青みわたり、芝生の中に名もまらぬ花ども、すみれに  
まじり色々ささて、雲の雲雀姿も見えずさへづりわひたるさまども、いはむかたなし。心  
ざす山はやゝ深くいる所にて、水のながれ岩のたゝすまひも、うつし繪をみるやうになむお  
ぼえける。うち吹く風にそことなくにはひくるに、人々心あくがれていそぎのぼりつゝ、みれ

ば、數えらぬ花ども枝もたわむまで開きつゝ、今日をすばと見えたり。山がくれともいはず、都のかたの人と見えてあまたつとひきて、木の本岩がくれの苔にむれるつゝ、歌よみ酒のみそあそびなどささぎまにぞ見えし。侍従のきみは花にながめいりてゐ給へるに、花よりもこの君に目とめたる人あまたありて、またがひありくも物むつかしくおぼえければ、花にはうとからで引き入りたる所もがなと、ねがひもとめつゝ、ゆくに、本堂のかたはらに、院家にもあらむ、ひはだの軒くち忍草所えがほにて、やれたるみすかけたるあり。此のつれたる人のなかにゑるたよりありて、こゝにまはしのやどりをかまへたり。たんざくとり出しうち吟じなどしけり。京よりもたせたる、ひわりと、さゝ免やうのもの、旅のまかなひはかなくしつゝあそぶに、花の本にてははじめより侍従の君に心をとめて見えたる法師、さまかたちよろしき三十ばかりなるありて、此のみすのもとまでまたひきて、花には心をとめて見えずして、このきみのおも影にながめ入りたるなりけり。猶みすの内へもかけりこまほしきさまのものむつかしければ、つれたるをのこをいだしていはせけるは、「人にまのおゆるありて、かく隠家求めたり。らうさきなり」などあらあらしくさへせいしければ、ちからなきさまにていでぬ。まはしありて十二三ばかりのわらはの美しくさうぞくなどまたるが、ちひさき花の枝にむすび付けたる物を、あなないもいはず、みすのうちへさし入れぬ。取りてみれば、

「夕がすみ立ち隔つとも花の陰さらぬ心をいとひやはする」と清げある手して書きたり。「返しま給へ」と此の君にすゝむれど、「はづかし」などいひて、かたはらの人にゆづるを、「情

なし」などいひすゝむれば、

「花に移るながめをおきてたが方にさらぬ心の程をわくらむ」とはのかに書きていだし給へり。これを見てかぎりなくうれしく涙もこぼれ出でにけり。さて此の法師の向後を使にとひければ、ふかくかくしけるをさまざまいはれて、わらはなれば「岩倉のなにがしの坊に、宰相の君といふ人にておはします」といふ。さてこの宰相、おもひのみをまるとして、尋ねよらむとぞおもひける。さて人々その夜はとまりぬ。この院の花ことにおもしろし。紅白枝をまじへたり。半酔半醒すれば、げにあそぶ事三日も事たるまじうおほえぬれど、京よりむかへの人あまた來ぬれば、かへりみがちにていでぬ。さてかの宰相は、花の本にてみし面影身にそひて、命もたふまじきほどになむ成りにける。ある時たよりをもとめてせうそこしける、「すぎにしをりの花の本にて、みずもあらぬながめより、また目にかへりこぬたましひは、いつまで袖の中に留めさせ給はむ。有りしばかりのついでも、又いつかは」などこまやかにかきて、

「花のひもとくるけしきは見えずとも一夜はゆるせ木の本の山」。返し、

「木の本を尋ねとふとも數ならぬかきねの花に心とめじな」。かゝることをたよりにて夜な夜なかどにたゝずみ愁苦呻吟まけるを、やうやう哀とや思ひけむ、心とけゆくけしきなれば、まばまば罷りかよひつゝ、後にぞ岩倉なる坊へもともなひなどして、なきゆくまゝに心へだてず。この宰相さはる事などありて、一二日見えぬをりは、あやしう心ほそきまでなむ

つれける。さてこのわか君をおもひかけたる人、こなたかなたより、花につけ紅葉にむすびたるたまづさ、むつかしきまでぞつとひきにける。されど返しよきほどにうちしつゝ、この宰相にわくる心もなく、三年ばかりも馴れにけり。さてその頃世を御ころのまゝにをさめ給ひし、おほきおとりの御子左大將殿の御まへにて、夏の雨まづかにふりて日ながき頃、世にあることうちとけつゝ、人々申しけるついでに、此の侍従のかたち心さま、たぐひ稀なるよし申し出でしかば、心うごかせ給ひて、御せうそこ度々あり。宰相出であひて申しけるは、「仰ごとくなむかたじけなく侍り。まゐらまほしきを、此のころみだりごゝちにわづらひてふしくらし侍り。いさゝかもよろしきひまわらばまゐりなむ。よき様に申させ給へ」とありしかば、まかじかのよし申す。五六日ありて又御つかひあり。此の度は御文あり。「吹く風ゆめにみぬとかやのふるごとも、思ひまられぬる心はわき給ふにや。ねぬなはのくるしきよしもおぼつかなく、五月雨のはれまは、心ちもすゞしくなり給ふならむ。おもひ立ち給へかし」などありて、

「はとゝぎす恨みやすらむ侍つことをさみにうつせる五月雨の頃」などあり。御返し、

「五月雨の晴まもわらばさみがあたりなどとはざらむ山時鳥」と聞きて、猶心ちわづらはしきさま、幾度も宰相申して、こもりぬさせたり。さてつれづれとこもりをらむもいかゞとて、ある時忍びて此の侍従をとまなひつゝ、岩くらへ行きしを、かのとの、人よくみて、御まへにてまかじかのよしありのまゝに申しければ、「ひでろのみだりごゝちはあらざりし事な

り」とていからせ給ふに、「宰相法師が所行なり。にくし」と異口同音に申し侍りしかば、やがて御使あり。「わづらひ給ふとありしはみないつはりなりけり。忍びありきし給ふなるは、かろしめらるゝなるべし」などうらみ給ひて、虎の中將にまかじかのよしねんをろにのたまひしかば、宰相にもいはず、さうぞくひきつくろひ、おなじ車にてまゐりける。御門さし入るより玉かいやきまばゆきまでおぼえける。人見えぬかたにてたいめんを給ふ。ともしびほのかに、空だきものくゆりいで、いとえんなり。此の人のまだかたなりなりし頃、殿上などにてほのみ給ひしこゝちせしは、ことの數にもあらず。まほにも見まほしくおぼえ給へどはぢらひたるさまなれば、心もとなくおぼすほどに、やがて御心とまうて、心につくべきあそびをま給ひつゝ、かたときさらすあひかたらひたまひける。御心さしのちかまさりはそふべけれども、たいかの宰相のことなむ心にはなるゝ折なく、めでたき御けしきもうれしからず。こゝろのかまひけるにや、つねには夢にぞ見えぬる。さて大將殿、此の法師を深くにくしとおもほせば、ちかき世界に徘徊させじと怒り給ふをもえらで、思ひのものよほしけるにや、猶此の殿のあたりうちありきけるを、口さがなきものゝ御まへはて、さまさま申しければ、あはぢの國へぞおひやらせ給ひける。これを聞くにも侍従はたへがたく、われゆゑとなき人のうきめをみるらむもかなしく、かの鳥の浪風をもともなきかばやとをなげかれける。たがひにいくだりのせうそもたぶべきやうなければおぼつかなし。かの宰相都をわかるとて、いかなるたよりをかるとめけむ、文書さておこせたり。忍びて見ればかきつけた

ることの葉おほし。

「ながれ木と身はなりぬとも涙川君によるせの有る世なりせば」。そこはかとなく書きたり。かゝりければこの大將殿の御心もうらめしく、情おくれておもへば、うちとけ奉る事もなし。はてはてはなやましく玉樓展覧の清風も心につかずさままじく、ひたぶるにながめがちにておとろへゆけば、かの人を思ふゆゑとはまらせ給はで、物のけにやとて祈りなどせさせ給へとまゐるしあるべきならねば、おなじさまにわづらひて、よわるやうにもせられしかば、母ぎみかなしみて、さまざま申してまかでさせ侍りぬ。さてかの岩倉にとまりぬたる伊與といふ法師を、忍びによびとりつゝ、床近くさぶらはせて、「宰相の我が身ゆゑとはき島へと聞き給ふれば、かなしくてかく心ちもわづらふなり。そこにいかにまろをうらめしくお思ひ給ふらむ」と涙にむせびつゝのたまへば、聞く心ちいはひかたなくなしくて、「かくおもはせ給ふこそ世にたぐひなく侍れ。なにかはうらみ奉るべき」といひつゝ、夜も更け行くに、猶枕のもとに引きよせ、さゝやき給ふやうは、「いかにもして宰相のむたまへるまへ、忍びて我をいざなひ給へ。聞えありてつみにあたり侍らば、もろともにその島にて送らむこそねがひかなふ心ちはせめ」とのたまへば、「わはれにかたじけなくはおもひ侍れど、まことにいとけなくおはします御心にてこそかくはのたまへ。かの淡路へわたらせ給ひたらば、かくれも侍らじ。やがて大將との聞かせ給はゞ猶にくしとしてこれよりまゐるつみにもあたり侍るべし。御心ざしあらば文かきて給へ。いかにも忍びてもちて罷らむ」といふに、猶同じさ

まにうち歎きつゝのたまへば、おはれにもふしぎにもおぼえて、つくづくと案じぬたるが、思ふやう、この宰相にわれもおくれて心ならぬ世にならふるもはいなし。またこの人のかくのたまふもいなみがたし、もとよりをしからぬ身なれば、世に聞えありともいかにせむ、さらばともなひて、今一たびたいめんせさせ奉らむとおもふ心あり。さてこの法師申し侍るやう、「わが君をたばかり申すべきやうあり。大將殿へも御母うへにも、文書をおかせ給へ。罪なき人を我ゆる遠き國へつかはされたる恨めしさ、とにもかくにも世に心もたまり給はねば、身をなげ給ひたるよし申させ給へ。ゆゑしき事なれども、さも侍らばたいされも侍らじ」などやうだいつきづきしく申せば、嬉しくおぼせど、又うち返し「母の歎き給ひて、心ちもわづらひ給はしいかにせむなどこれのみぞかなしき」とのたまへば、「それは後に忍びて御心ひとつえらせ給はし、慰め給ふべし」などいへば、げにもとおもひつゝ、嬉しかりけり。大將殿よりは、たえずおぼつかながらせ給へど、おなじさまなるこゝちのよし聞えてすぎゆく程に長月にもなりぬ。いと物心ぼそく、ともすれば露にあらそふ涙ふりおつ。ある時中將殿も物まうでえ給ひ、人すくななる折、忍びて岩倉の伊與法師をめしに遣はしたれば、心を与て、夜にまぎれて來たり。かねて契り定め給ひしやうに、文書をおき物とりきたりぬなとしつゝ、ねたるやうにぞ忍び出で給ひける。此の法師かひがひしきものにて、事とのへ乗り物などかまへて、あけぬほどに山崎までぞ來たりける。こゝにえはしやすめて、「常の旅人の行きかふ道は人見とがめぬべし」とて、あらぬかたの山路にかゝれば、白雲跡をうづみ、

青嵐道をすゝめつゝ行くほどに、此の若君習はぬ旅にいけるこゝちもせで、すまの浦につきぬ。名ある所なれば、海上の月もながめまほしけれど、「人もこそ見とがひれ」など、伊興法師せいしければ、心ならず衣かたしきてねたまひたれど、聞きならはぬ浪の音おどろおどろしく枕に近し。源氏の大将の「心づくしの秋風に」とのたまひしも思ひ知られて、

「秋風に心づくしの我が袖やむかしにこゆる須磨の浦浪」と獨ちてすこしうちまどろみたる夢に、此の宰相あさましげにおとろへて、「かく尋ねおはしましたるうれしさは、この世ならでもなどか」などさめざめとなきて、

「磯枕心づくしのかなしさに波路わけつゝわれも來にけり」といふともなきに「たゞ今淡路へわたる舟なむある」といふ聲に驚きぬ。あはれと思へど、物さわがしければ、出で立ちつゝ舟に乗らむとてまばし汀にやすらふほどに、曉近き月浪の上にすみ渡りて心ぼそし。東船西船つなぎ置きたるにも唯見江心秋月白と樂天の詠せしも、かゝるにやとおぼえたり。こぎ行くほどに、岩屋といふ浦につきぬ。まことや都には、侍従の身をなげたる聞えありければ、大将殿あわて騒ぎ給ひつゝ、「やうなきすすみわざして人のかたきをもおひ、又わたらさましたる人をも失ひけるよ」と悲み給ひける。世の人もこの殿をよろしとも申さず。母うへは、此の書きおき給ひたる文をかほに引きあてゝ、そのまゝおきもあがり給はず。中將たゞ御子のやうにかしづき給ひしかひもなく見なし給へば、をしうかなしうぞおぼしける。さていはやにとまり給ひて、かの人のあるところはやくとはまほしけれども、つゝましく、あな

去らではいかゞなどためらふ。松はの浦とやらむにわたらせ給ふよし京にて聞きしかば、まづそのうらを尋ぬるに、繪島が磯のむかひなるよし申すを、若君聞き給ひて、京極中納言の、「やくやも去はの」とながめ給ひしも、此の浦のことにや、身のこがれぬるもことわりぞかしくとおもふ。さてその日はこの浦を尋ねて、こゝかしこにやすみつゝ、暮るゝほどに、去ぐれあらわらしくふりて、浪の音たかし。海士の家ゐるのみにて、いづくをはかりともおぼえぬに、灯のひかりほのかにみゆ。それを去るべにてゆけば、板ぶきの堂あり。海人の蓬屋にやどらむよりはこゝにこそ「などいひて尋ねよるに、かたはらに小庵あり。立ちよりて見れば、松の葉ふすべて、老僧ひとりむかひゐたるなるべし。」「あない申さむ」といへば、からびたる聲にて「たぞ」といふ。これは津の國の方のものなり。四國へわたらむとするに、たよりの舟におくれてまどひ侍るなり。この御堂のかたはらに雨やどりせまほしく侍るなり」といへば、あやしくやおぼえけむ、たち出で、灯明の光に見るに、やつしたれど此の若君をたゞならずや見けむ、「あないとほし」などいひて、庭の内へよびいれぬ。あはれげにすみなしたり。達摩大師の畫像一幅かけて助老滿圓麻の衾ばかりうちおきたり。暫し物語などしつゝ、かの人の向後とはまほしけれどうちつけなればうちいでず。この若君をつくづくとみて、「怪し。都がたの人にてぞおはすらむ。我むかし都のものなり。はたちはかりの年、人をあやまつ事ありて京にも住みかね侍りしかば、やがてもとより切りて、江湖山林にうかれありきつゝ、年経侍りけるに、いかなるえにしにか、かゝる漁屋のとをりを去め、紫鷺白鷗を友としつゝ、三十餘年

送り侍りぬる」などかたるもあはれなれば、それをたよりにて、此のながされ人のことをとひければ、「あの松帆の浦にさる人侍りし。この夏ごろより此の島へうつり給ひしなり」といふ。「くはしくかたり給へ。聞かまほしきゆゑあり」といへば、「まづはの浦よりこの庵までは常にわたり給ひつゝ、みやこのかたの戀しきなど語り給ひけるが、殿上人の御こととて、明暮戀ひなき給うて、心におもふことをば隔て残さず語り給ひしなり。そのおもひにや侍りけむ、心ちわづらひ給ひしが、日日におもひ給ひて、この庵へもわたり給はず、つきそひ侍る人も見えねば、あはれに見侍りて目をへだてずまかりあつかひしほどに、つひになくなり給ひぬ。今日七日になむなり給ふ。煙になし侍る事も此の僧志侍りし」とかたるに、きくこゝちものおおばえず、うつぶし臥して泣きこがれぬ。この僧「いかにいかに、さてはゆかりにてこそおはすらめ」などいひて、我もうちなきけり。やゝありて伊豫法師申しける、「今まではつゝみ侍れども、かの人はや失せ給ひぬる上は、世にはいかりもなし。これこそ戀ひなき給ひしとのたまふ殿上人よ。かくあやしき山賤になし奉るも道のはどの人めをおもふゆゑなり。さるにてもまかあつかひ給ひて後のことなどまてまたゝめ給ひける御心ざし、ことの葉たるまじ」などいふ。老僧いひけるは、「かの人のいまはのとぢめに、心ざしのはど有りがたしとの給ひて、ちひさき法花經念珠などたまはせける」とて取りいでゝみす。平生手なれ給ひしものどもなれば、いよいよ目もくるゝばかりなり。又巻き固めてこまかにまたゝめたる文の上に、「四條殿へ」とて青侍の名かきたるあり。「これも今はのきはに、よきたよりわらは、まか

じか尋ね奉れとのたまひし」といふ。「此の文こそ此の御かたへなれ」といへば、「あな嬉し。さらばたしかに奉り侍る」といふとき、開きてみるに、岩倉の人々侍従の君のかたへなるべし。都を出でしより此の島に住みしありさま、今はのきは近きさまなど書きあつめたる鳥のあとのやうに見ゆ。

「くやしきはやがてきゆへさうき身ともまらぬ別れの道老の露」などやうにぞ侍りける。ありし夜かのすまにての夢も、今は思ひあはせられていと哀なり。つとめて此の僧を去るべにて、松はの浦へゆきてまづ此のほど住み給ひし庵のさまをみれば、あさましげによるほひかたぶきて、松のはしら竹の垣もみなくち行くさまなり。いかでこゝに月目をすぐしたまひけむと思ふも悲し。さてすこし隔たりて松の一むらある所におろそかなる塚あり。あるしの松一もとうえたるを、「これにぞ侍る」と申せば、たちよりまろびふしてぞ伊豫法師もなきける。かの王褒が柏樹ならねども、これも涙に枯れやまなましとぞ覺えける。やゝためらひて、此のえるしの木に、若君かきつけ給ひける。

「おくれじの心もえらで程とはく苦の下にや我をまつらむ」とてやがてこの海に身をなげ給はむとするを、伊與法師とりとめ奉りて申しけるは、「宰相の事いまはいふかひなし。御心ざし侍らば跡をとほせ給へ。御身を失はせ給はば罪をこそおほせ給はめ。又御母上の御歎き淺かるべしやは」などさまざま申しければ、力なくてはいもとげ給はず。「さらばさまをだにかへむ」とのたまふ。「それもあたら御身なり」とせいしけれども、まひて身もなげつべき

さまの玄給へば、今年十六に成り給ふかたちは、つぼめる花、山のは出づる月のさまし給へる、御ぐしをなくなくそり落して墨の衣にやつしぬるもゆめのやうなり。うらめしきものは此の世なりけりとぞ覺ゆる。伊興法師も墨の袖いとゞ色ふかくなしつゝ、ともなひ奉りて高野山のかたへや行きけむ。後はまらずかし。

松帆浦物語  
終